

6年時個別計画実習 海外実習レポート

1013652M 金子昌裕

中国医科大学での1ヶ月 [2015/4/1-4/30]

・中国医科大学について

中国医科大学は1911年に日本の満鉄株式会社が創設した満州医科大学を前身とした旧国立瀋陽医学院と1931年に創立された中国共産党の医学校（中国医科大学）が第二次大戦後の1948年に合併して成立した国立の医科大学です。その歴史的背景から日本との交流が盛んで、1961年から日本語で医学を学ぶ日本語クラスが開講され、現在まで多数の卒業生が日本で学位を取得し、又は日本で医師免許を取得して日本で働いています。中国の大学制度は一般的に一等、二等、三等大学に分かれており、さらに一等大学の医学部のなかでも北京、上海、香港の大学は世界的に評価が高い大学と言われています。中国医科大学はそれら南部の大学に次ぐ地位にありますが、遼寧・吉林・黒龍江の東北三省最大の規模と権威を誇る東北地方の基幹病院であり、日本で言うと北海道大学のようなイメージかもしれません。



Photo 1 CMU from hotel room

実習先となった大学の第一病院の所在地は遼寧省最大の都市である瀋陽の中心部にありました。北側は毛沢東の銅像の立つ中山広場に面しており、南に5分ほど歩くと瀋陽第2の大通りである大原街、西に15分ほどのところに高速鉄道の停車駅である瀋陽駅があります。病院の規模ですが、一番大きい一号棟は26階建て、その他救急や検査、VIP用の病棟など計5棟あり、ベッド数は3000以上、月の入院数は10000人前後という日本では信じられないサイズの巨大病院となっています。またこの第一院以外にも5つの付属病院があり、合計のベッド数は10000床を超えています。驚くべきことに、このサイズをもってしても入院や手術はほぼ空きがない状態で混雑しており、循環器科など患者が多い科では入院に数ヶ月も待たなければならない状態ということでした。もちろん入院患者以外

にも外来患者も受け入れており、2階から6階までの外来エリアは、診療時間中外来患者さんでごった返しています。

・実習内容

私は内分泌科、感染科、甲状腺血管外科、腫瘍内科を各一週間ずつ回らせていただくことができました。内分泌内科で印象に残っているのは初めての外来見学です。中国の外来はただひたすらに数が多く、多いときは一日一人で100人以上を対応しないとイケないそうで、私の見学日はやや少なくても60~70人程度という状況でした。診察室には常時患者さん、次の患者さん、質問に来ている診察が終わった患者さんが入っており、混んでくると次の次の次くらいまで患者さんが入り込んでしまい、渾沌とした状態を呈してプライバシーへの配慮は霧散します。また、患者さんはアクティブに質問し、先生の処方箋に注文をつけることが



Photo 2 Professors at Endocrinology dep.

多く、その辺りの医師患者関係が日本とは大きくことなる印象を受けました。外来や病棟の疾患は主に糖尿病で、次に甲状腺という感じでしたが、PCOS、アジソン病、ターナー症候

6年時個別計画実習 海外実習レポート 1013652M 金子昌裕

群、2型多腺性自己免疫疾患などの比較的希少な症例のかなり進行するまで放置されていた患者さんを診ることができ、典型例を学ぶという意味では勉強になるケースが多かったです。内分泌科は研究科としても国家重点研究中心に選ばれており、甲状腺疾患を中心に基礎、臨床両面で研究が進められていました。既報の投稿論文は NEJM を筆頭にハイレベルな国際誌に掲載されているものが多く、国際的にも評価の高い研究機関であることがうかがえました。

2週目は感染科を中心に回るはずだったのですが、冬場はあまり特徴的な患者さんがいないということで、合間に風湿 (RA[リウマチ]) 免疫科と伝染科を1日ずつ回らせてもらいました。感染科は院内の FUO Fever Of Unknown Origin の患者さんの診断と治療を受け持つ診療科で、患者さんは aspergillosis, brucellosis, empyema, psychosomatic disease など多様なのですが、診断がつき次第各科へ再転科してしまうため、ケースとして実際に見られたのはほとんど肺炎の患者さんでした。風湿免疫科では外来の見学をさせてもらいました。主任教授の肖先生は国家認定のスーパードクターとして有名な方で外来患者さん遠くは北京から来られる方もいて外来は RA, SLE, AS[強直性脊椎炎]の患者さんで非常に賑わっていました。伝染科は感染力のある疾患を扱うところで、主に肝炎と AIDS 患者さんの入院治療が行われていました。症例としては AIDS 発症患者さんの PCP [pneumocystis pneumonia] と粟粒結核、そして外来ではほぼ治りかけではあったもののハンタウイルス感染症 (epidemic hemorrhagic fever) を1症例見るのが印象的でした。

血管甲状腺外科はその名の通り、甲状腺と、胸郭と頭蓋内以外のすべての血管の外科手術および血管狭窄や解離への IVR を担当しており、一週間の間に甲状腺の良・悪性腫瘍切除術、下肢静脈瘤へ静脈瘤剥去術、腹部大動脈瘤への人工血管置換術、大動脈弓部の大動脈解離へのステント治療と様々な症例の手術に第1～第4助手の立場で参加することができました。外科の手術と病棟を見ていて日本との違いを感じたのは創部処置と清潔操作の部分です。病院のシステムや設備、患者さんの状況やスタッフ全体の意識など様々な要素を孕むものなので必ずしも日本のシステムがいいとも言い切れませんが、少なくとも日本の学生は色々と驚く部分が多いのではないかと思います。

最終週は腫瘍内科でした。中国医科大学内で化学療法が行われているのは主に各種外科と腫瘍内科で、腫瘍内科では特に first

line/second line の標準治療が効奏しなかった患者、または医学的経済的な理由で標準治療が行えない患者が紹介されてくる場合が多いということですが、患者数は月 1000 人前後、医大一院の約 1/10 の患者を引き受ける非常に大きく、また忙しい診療科という印象を受けました。腫瘍内科は内分泌科と同じく基礎研究にも精力的な科で、内分泌科よりもやや小規模ながら毎年10人前後の PhD を輩出し、数多くの学術論文を世界に発表されていました。腫瘍内科における診療で日本と



Photo 3 Doctor's office at Oncology dep.

もっとも違う点は、治療が患者さん一人一人の経済状況によって大きく左右されてしまうところではないかと思います。見学中紹介されたケースで代表的なものを挙げると、ある乳ガンの患者さんの家族は中国では認可されていないが従来よりも3ヶ月延命が期待できる抗がん剤 (TDM1) を米国まで買いに行ったが結局間に合わず使用できなかった、ある肺ガンの患者さんは陽性だったとしても生物製剤を使い続ける経済状況にないということで EGFR や ALK の遺伝子解析 (検査、治療ともに保険適応外) を拒否した、ある患者さんは画像と症状から悪性を疑われる腫瘍が発見された患者さんは生検 (保険適応外) を拒否して抗がん剤の処方だけを希望した、いずれも日進月歩の進展のなかで医療費が天井知らずに高騰している腫瘍内科ならではのと言える、中国の経済状況を色濃く反映したケースであるように感じました。

・日本との違いとして驚いたこと

病院内で最も日本との違いを感じたのは患者さんと医師との関係がフラット (もしくは患者 >> 医師) で患者さんが強い意見を持ち、その意見が強く優先されているということです。中国の患者さんはかなり大胆に医師に意見を述べ、治療も診断も自分の納得したものしか従いません。そしてセカンドオピニオンにもなんのためらいもありません (外来診療中に「では北京の病院に行きます」と言われていた先生もいました)。また、一度患者として関係持つ、又は家族や友人から紹介されてしまったら最後、医局だろうが廊下だろうがと構わず押しつけてきて診断治療を要求します。日本では医局に予約

6年時個別計画実習 海外実習レポート 1013652M 金子昌裕

なしで患者さんが来ることはあり得ないしあっても追い返されますが、中国では毎日何件もある日常茶飯事で、先生たちはボランティア業務として対応しなければなりません。もちろんここまで来ると明らかに行きすぎですが、もう少し日本の患者医師関係も中国よりになってもいいのかなと感じました。

また、院内で驚くのは女性医師が多いことです。内分泌内科の写真などが典型的だと思いますが、女性医師が非常に多いです。学生や先生方に理由を尋ねたところ、社会的に男女同権の意識が強く女性がキャリアを諦めることが少ないこと、女性の方が成績優秀で必然的に医学部法学部などの女性比率が高くなること、特に内科医学の分野では女性差別がほとんどなく女性が高いポストを得やすいこと、などが背景にあるようです。政治分野や企業の高いポストに関してはまだまだ女性が活躍できる場が限定されているようですが、医学と司法分野でここまで女性比率が高い国は世界的にも少ないのではないのでしょうか。日本ではあまり知られていないようですが、この部分は本当にこの隣国から学ばなければいけないところが多いように思います。

・院外での生活



Photo 5 中央大街 in Harbin



Photo 4 大悦城, the biggest shopping mall in Shenyang

大学周辺は東北地方最大都市瀋陽の中心とあって、スーパー、飲食店街、地下鉄の駅も近く、生活には不便することはほとんどありませんでした。東北地方の食文化は餃子や春餅(春巻きではない)、豚肉、そして豆や米などの穀類を加工したものが有名です。個人的な印象としては同じ食べ物でも数十元以上のレストランの食事はいずれも美味しいが、数円で食べられる店は食べられなくはないけど連続して食べたくはない、という感じでした。

休日には日本語クラスの学生さんに連れられて他の都市を訪問することもできました。訪れた都市の1つはハルビンです。ハルビンは中国の最東北、黒竜江省最大の都市で、ロシアによって開発された町並みそのまま残っており、中国のなかにある西洋都市というような奇妙な景観が楽しめます。中国では建て直すよりも再利用する文化が根強く、昔ロシアのホテル、官邸、銀行、住宅であったものが博物館になったり、学校になったり、銀行になったり、飲食店になったり、はたまた廃墟として放置されていたりと、独特の趣があると言えるかもしれません。最先端?のブックカフェ風の果戈里書店(ゴーゴリ書店)とロシア風の町並みを楽しめる中央大街の夜景がおすすめです。

以上、病院での出来事と院外での経験についてほんの一部ですが書かせていただきました。日本との違いや中国の特色についての記述が多くなってしまいましたが、一番自分の中で良かったなと思っていることは、中国人も日本人も同じ人間で本質的にほとんど変わらないということを実感できたことです。当然のことかもしれませんが、みんな同じようなタイミングで皆喜怒哀楽の感情を持つし、同じような悩みや希望を持っている、同じ人間なのだ、ということを実感できたのが一番のいい経験だと思っています。正直に言って現在の日中関係やお互いの印象は良くないと思います。ただ、こんなに近い距離に、お互いに特徴ある文化と社会を持った国があるのにお互いがお互いのことを知らずに放っておいているというのはあまりに残念なことではないでしょうか。今後はこの自分の経験を1人でも多くの人に伝えて、もう少しお互いにいい関係を持った未来が訪れる手助けをしていきたいと思っています。

最後になりますが、お世話になりました劉先生をはじめとして国際交流課の皆様、日本語クラスの藤さん、湯さん、王さん、そして各診療科の先生方、貴重な4週間の体験をさせていただきまして大変ありがとうございました。